

# 第1章 大宮壳神社および薬師堂の石造物

京都府立大学文学部考古学研究室・地理学研究室

## はじめに

大宮壳神社は京丹後市大宮町周枳に位置する。社地は平地にあり、周枳地区のほぼ中央にあたる。東側には標高 269.5m の木積山を主峰とする標高 200m 前後の低い山々が連なり、西側には竹野川による河岸段丘の上に田畠や家々が広がる。神社周辺には馬場、神野、今市、神嘗、勧請垣、祢宜殿垣、岡の宮、主基田といった神社との関係をうかがわせる地名が残っている。

神社の一の鳥居が面する府道間人大宮線は、周枳地区を南北に縦断し、古くより竹野郡から与謝郡を結ぶ間人街道として利用されてきた。500m ほど西側には昭和 45 年（1970）に開通した大宮バイパスが平行し、さらに西方には竹野川が北流している。一の鳥居付近は大門先と呼ばれ、10 月 10 日前後におこなわれる例祭の本祭での御旅所としても利用される。ここから神社正面までは 145m の松縄手の参道が続き、昭和 58 年（1983）頃から献納されてきた約 40 基の燈籠が立ち並ぶ。

神社の祭神は大宮賣神と若宮賣神の二座である。本殿は昭和 2 年（1927）の北丹後地震後に建てられ、東に移された忠靈殿となった旧本殿は、元禄 8 年（1695）の建立とされている。本殿の前には六角火袋をもつ石燈籠があり、東側のものには徳治 2 年（1307）の紀年銘があり、重要文化財になっている。当社は戦国時代に一度衰退したものの、江戸時代には宮津藩主の崇敬を受けて再興した。現在の神額や、燈籠①、②には藩主本庄家の家紋、繋ぎ九つ目が記されており、社務所は明治 5 年（1872）に藩主の別宅を移築したものである。

境内には、拝殿・本殿に向かって左側に絵馬社、庚申社、右側に旧本殿と社務所、資料館が建ち、本殿周囲の禁足の社と呼ばれる鎮守の森には、大歳社、西の三社、東の五社、天満天神社、八幡社と



図1 大宮壳神社の位置（2万5千分の1 地形図「峰山」を 50% 縮小）



図2 境内全景

いった末社が鎮座する。なお、正面から二の鳥居に向かって右側には木製の燈籠が建つ。銘文から日露戦争30年を記念して従軍者らによって奉納されたことがわかる。境内地の四方には、守護神として四天王が祀られていたが、現在は南の弁財天社のみが残り、東の摩利支天、北の毘沙門天、西の牛頭天王の三社の跡地には碑がたつ。さらに神社北東には薬師堂が位置する。また、境外社として、石明神、小仲神社、内神神社がある。

京都府立大学歴史学科では、3回生向け開講科目「考古学実習」の一環として、「地理学実習」「建築史実習」と合同で平成29年8月7日から9日にかけて石造物調査をおこなった。参加者は以下の通りである。調査にあたっては大宮壳神社宮司の島谷泰夫氏、薬師堂世話人の田中悦夫氏にたいへんお世話になった。記して謝意を表したい。  
(岡田大雄)

教員等 上杉和央、岸泰子、菱田哲郎（京都府立大学）、向井佑介（京都大学）、橋本学（宮津高校）、新谷勝行（京丹後市教育委員会）

学生 近藤史昭（M1）、竹内祥一朗（4回生）、岩田聖也、植松紀子、大須賀広夢、岡田大雄、小野大樹、角藤美紀、小山琴乃、高田一輝、中村美琴、村上なつか、百鳥千子（3回生）

## 1. 大宮壳神社境内の石造物

境内に現存する石造物のうち、燈籠8基、玉垣140本、狛犬2基、手水鉢1基、鳥居2基について報告をおこなう。なお、実測図は縮尺40分の1を基本とし、それ以外については図に注記する。本殿前の中世の石燈籠については、後日により詳細な検討をおこなうこととし、今回の報告では割愛した。

燈籠1・2と3・4、5・6、7・8はそれぞれ一対をなしている。燈籠1の銘文には「明治十有八歳三月吉日」と記されており、この燈籠が明治18年（1885）に建立されたことがわかる。燈籠2の銘文は昭和10年（1935）のものであり、燈籠1と比べると年代が新しい。そのため、後世に燈籠1の形態をまねて作製された可能性が高い。燈籠3については銘文が風化しており、年代を読み取ることはできなかったが、燈籠4には文政3年（1820）の銘文が存在した。どちらの燈籠も形態が類似しており、また境内の石燈籠では珍しく砂岩を使用し

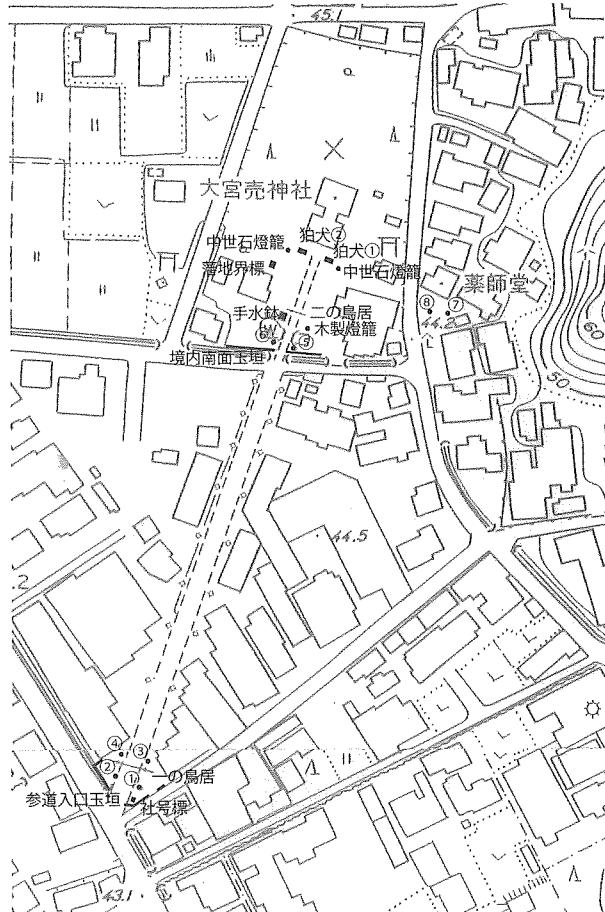


図3 石造物の配置（2500分の1）

ているため、初めから一对であることを意識して作られた可能性がある。燈籠5・6の銘文はどちらも昭和7年（1932）三月一日のものである。基台には「満州建国之日奉納」と記されており、この2基の燈籠が満州建国を祝して奉納されたものであることがわかる。燈籠7・8は薬師堂の正面に存在している。

狛犬1と2は対になっており、拝殿前に位置している。狛犬1には年代に関しての銘文が存在しないが、狛犬2の基台に「慶應二丙寅」の銘文がみえるため、おそらく狛犬1も同時期に寄進され

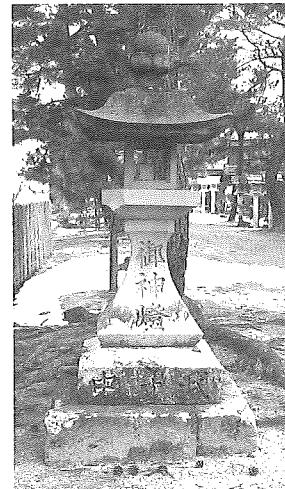
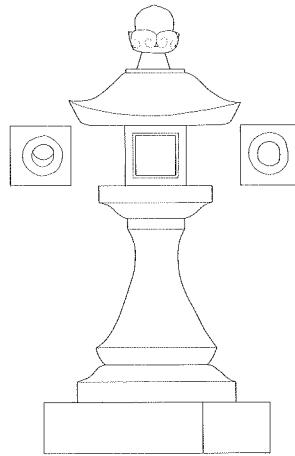


図4 大宮壳神社の石造物（1）



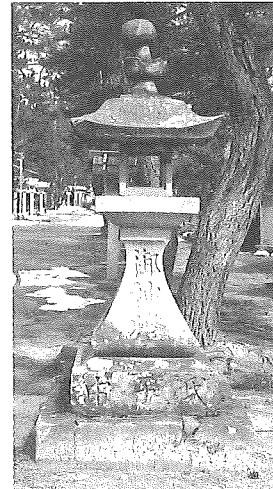
② (①と同形)

[竿部正面] (南) 獻燈  
 [竿部背面] 昭和十年十月吉日  
 [基台正面] 氏子中 (横書き)  
 [基壇背面] 寄付者  
 堀徳五郎  
 堀竹治  
 小幡良吉  
 川村政治  
 吉岡與三八  
 吉岡又右工門  
 吉岡秀治  
 田中當吉  
 田中貞吉  
 高田権之助  
 永岡徳輔  
 山中八郎右工門  
 松本躊茂  
 小仲由茂



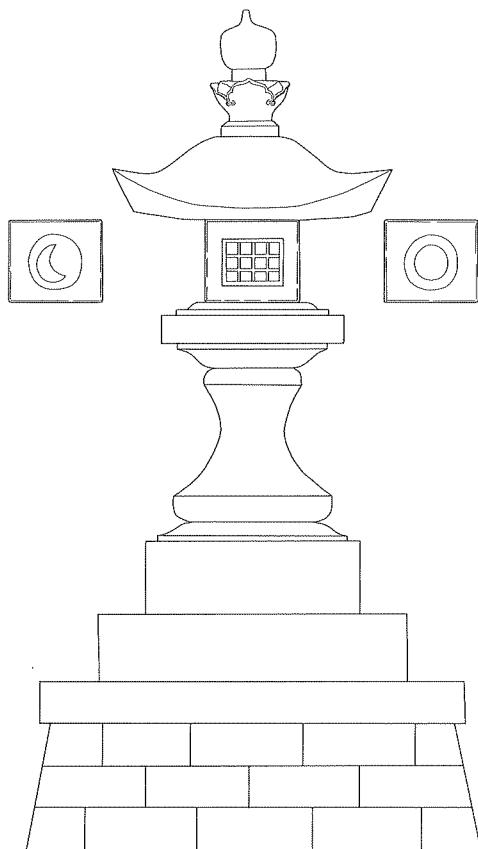
④ (③と同形)

[竿部正面 (南)] 御神燈  
 [竿部背面] 文政三辰天  
 [基台正面] 氏子中 (横書き)  
 [基台背面] 石工  
 [基台右側面] 世話人  
 佐兵衛  
 貞右衛門  
 浅治郎  
 [竿部正面 (南)] 御神燈  
 [竿部背面] 八月祭鼈亦  
 [基台正面] 氏子中 (横書き)  
 [基台左側面] 今城  
 藤原  
 意定



③

図5 大宮壳神社の石造物 (2)



(5)

〔竿部正面（南）〕 照闇  
〔基台背面〕 昭和七年  
三月一日當  
滿洲建國  
之日奉納  
大連市在住  
松村久兵衛  
謹書

〔基壇背面〕 石工  
吉岡半藏  
長谷川伊之助  
謹書



(6) (5)と同形

図6 大宮壳神社の石造物（3）

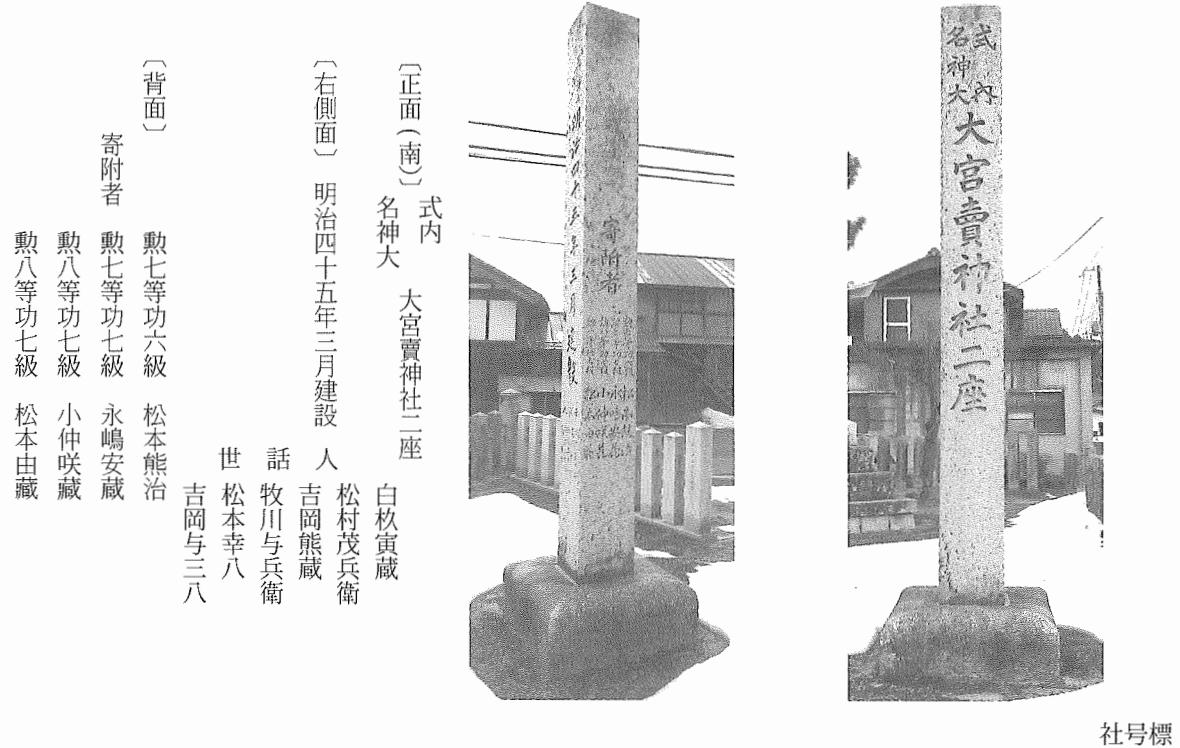


図7 大宮売神社の石造物（4）

た可能性が高い。

手水鉢は平面がほぼ正八角形の形状である。「享和元年酉八月 願主河嶋藤四郎」の銘文が記されているため、この手水鉢が享和元年（1801）に河嶋藤四郎によって寄進されたものであるということがわかる。

藩地界標は絵馬殿北側に位置しており、北面、東面、南面に「従是東南宮津領」と記されている。これは宮津領である周枳と、峰山領である河辺の境界に存在していたものが大宮売神社境内に移されたものであると思われる。

一の鳥居は参道入口に位置している。左柱の背面に「明治四十四年十月建設」の銘があり、この鳥居が明治44年（1911）に築造されたことがわかる。右柱の背面にはこの鳥居の寄付者と世話人の名前が記されている。また、一の鳥居の東南の位置に社号標が建てられている。鳥居の翌年の建設であり、世話人などの人名も共通する。

二の鳥居は境内入り口に位置しており、その柱の背面には建設の年月、寄附者と世話人の名前のほかに、石工の氏名も記されている。一の鳥居と同年に築造されており、その工事の際に多くの遺物が出土している。

（大須賀広夢）

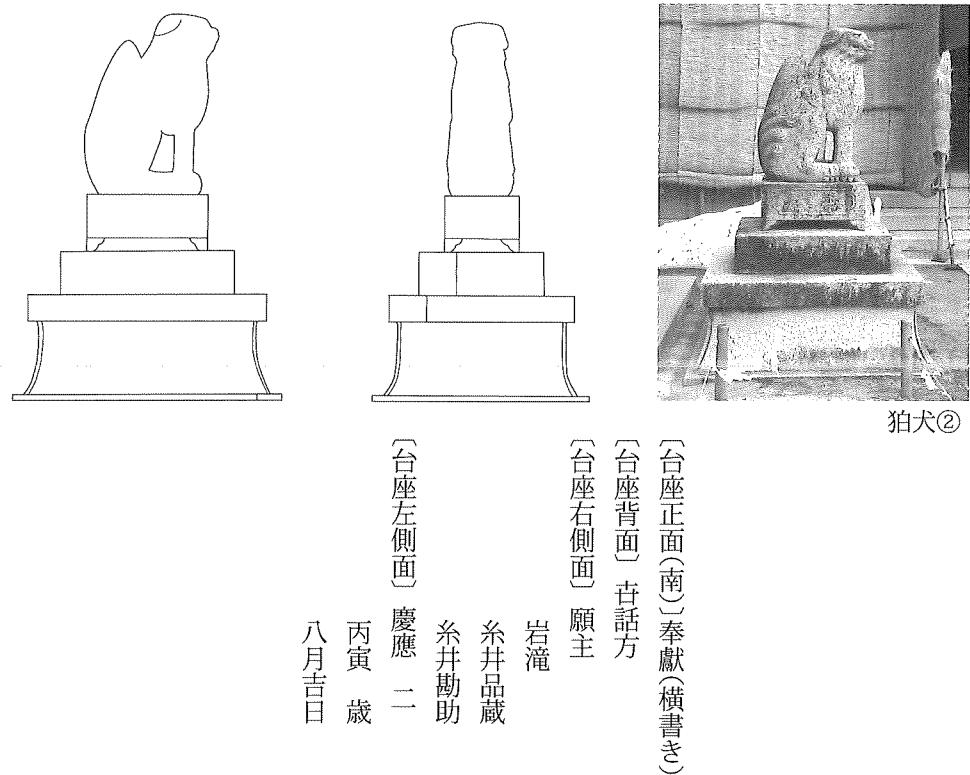
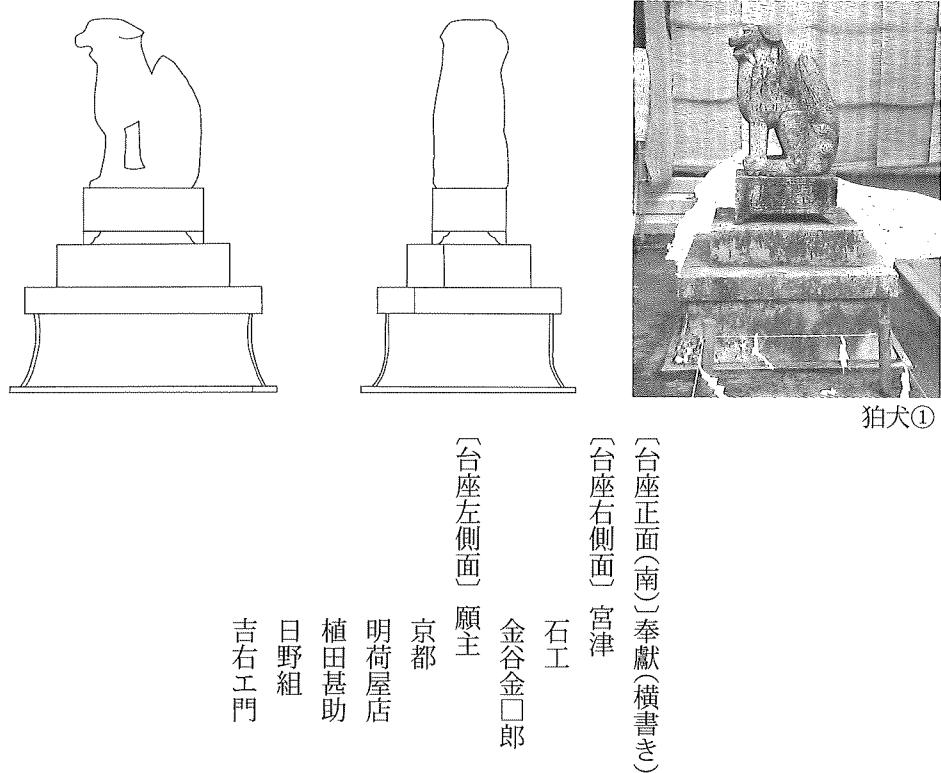


図8 大宮壳神社の石造物（5）



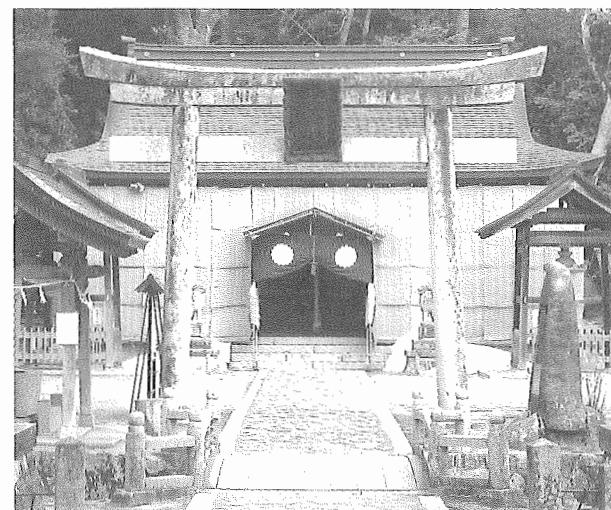
藩地界標



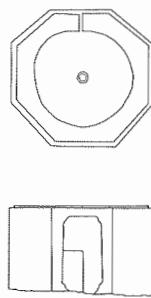
手水鉢



一の鳥居



二の鳥居



享和元年酉八月  
願主 河嶋藤四郎

〔右柱背面（北）〕  
明治四十四年十月建設  
社掌 島谷民駄  
願主 河嶋藤四郎

〔左柱背面〕  
石工 安田龜平  
口六ノ

〔右柱背面（北）〕  
寄附者 白杉寅藏  
松村茂兵衛 世話人 松本幸八  
吉岡与三八  
氏子中  
〔左柱背面〕  
明治四十四年十月建設  
社掌 島谷民駄 世話人  
白杉寅藏  
吉岡萬助 德太郎  
嘉三郎  
庄五郎  
吉岡与三八  
氏子中  
〔右柱左側〕  
石工 安田龜平  
口六ノ

〔右柱背面（北）〕  
牧川与兵衛  
吉岡熊藏  
松村茂兵衛 世話人  
白杉寅藏  
吉岡熊藏  
松本幸八  
牧川与兵衛  
吉岡与三八  
氏子中  
〔左柱背面〕  
京都 万藏  
吉岡萬助 德太郎  
嘉三郎  
庄五郎  
吉岡与三八  
氏子中  
〔右柱左側〕  
石工 安田龜平  
口六ノ

図9 大宮壳神社の石造物（6）

## 2. 薬師堂の石造物

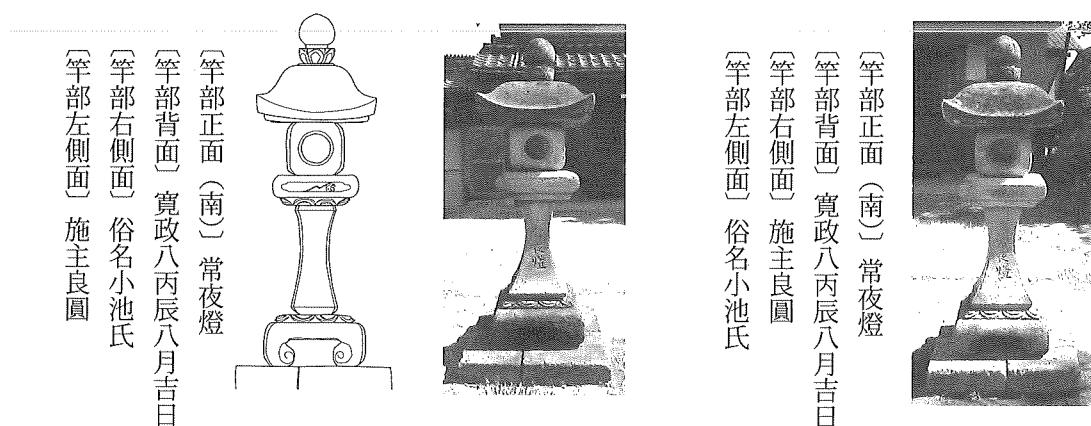
薬師堂は大宮壳神社の東側に位置する。伝承では東方にそびえる木積山に伽藍があったが、天正期に焼失し、このときに本尊も大きく破損したとされる。本尊の薬師仏は後世に作られたものであると伝えられており、本堂には元の薬師像の一部とされる破損部位が保存されている。境内には、今回報告する燈籠7・8のほか、燈籠8の西南に六地蔵を祀る小祠とその周囲に併せ祀られた五輪塔や地蔵がある。さらに境内南端には寛政3年（1791）の建立で、「南無阿弥陀仏」と刻まれた仏宝塔がある。また、燈籠8に隣接して摩利支天社跡と記された碑が建てられており、かつて大宮壳神社の四方に祀られた四天王の社のうち東側の摩利支天社があつたことがわかる。

燈籠7・8はどちらも黒色の花崗岩が用いられている。いずれも「寛政八丙辰」の紀年銘があり、この燈籠が寛政8年（1796）に建立されたということを示している。また、燈籠の銘文から寄進者は俗姓が小池氏の僧侶、良圓であると判明した。小池氏に関しては、明治十七年十二月丹後國中郡寺院明細帳によると「（前略）宝暦二壬申年大光良圓庵主當ノ住人小池助右工門首唱シテ信者米錢テ募集シテ堂宇庵室テ建立シ瑠璃山淨名庵ト名ケ同村周徳寺工附属ス方今本堂已存ス」と記載がある。瑠璃山淨名庵は薬師堂の本来の名称である。薬師堂を建立する時に尽力した人物として小池助右工門の名前が知られる。燈籠を寄進した良圓の俗姓が小池氏ということと小池助右工門が関係するのである。薬師堂の建立は宝暦2年（1752）であり、燈籠を建立した寛政8年（1796）とは40年以上の間がある。そのため薬師堂と燈籠を建立した人物が同一の可能性は低いと考えられるが、創建者的一族からその堂を守る僧侶が出た可能性がうかがえる。

（中村美琴・岡田大雄）



図10 薬師堂全景



⑧ (7)と同形)

(7)

図11 薬師堂の石造物

### 3. 大宮壳神社の入口・境内の玉垣

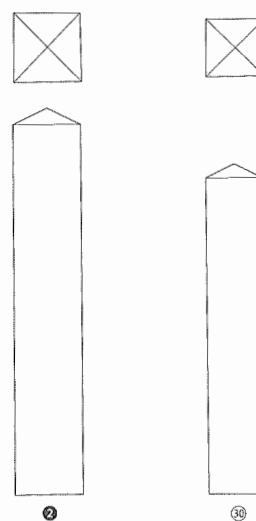
大宮壳神社には、参道入口と境内南面の2か所に石造の玉垣が存在する。

#### (1) 参道入口の玉垣

参道入口の計81本の玉垣は、76本の子柱と3本の親柱、2本の特大の柱からなる。玉垣の角や、通路によって分断された箇所の両側には、親柱、特大の柱が建てられており、そのうち特大の柱は参道の両脇に立てられている。それぞれの玉垣には寄進者の住所と氏名が記されており、多くが「宮津町」や「峰山學」、「京都市」といった市町村スケールの地名表記であるが、中には「上大ノ」など神社近辺の字地名も記されている。寄進者名のうち、75件が個人名であり、残りの6件が企業名であった。なお、西面の玉垣は、藪が繁茂しており、銘文の判読ができなかった。

#### (2) 境内南面の玉垣

境内南面の計59本の玉垣は、55本の子柱と4本の親柱からなる。境内南面の水路沿いに立つ玉垣は、参道東側に32本、西側に27本存在しており、東側西側それぞれの両端に親柱が立てられて



いる。参道入口のものと同様に、玉垣には寄進者の住所と氏名が記されるが、「當村」、「口大ノ」、「河辺村」などの神社近辺の地名が多くを占めている点は、入り口のものとは相違する。寄進者名のうち、57件が個人名であり、「和久傳」、「多田支店」の2件が企業名であった。

(竹内祥一朗)

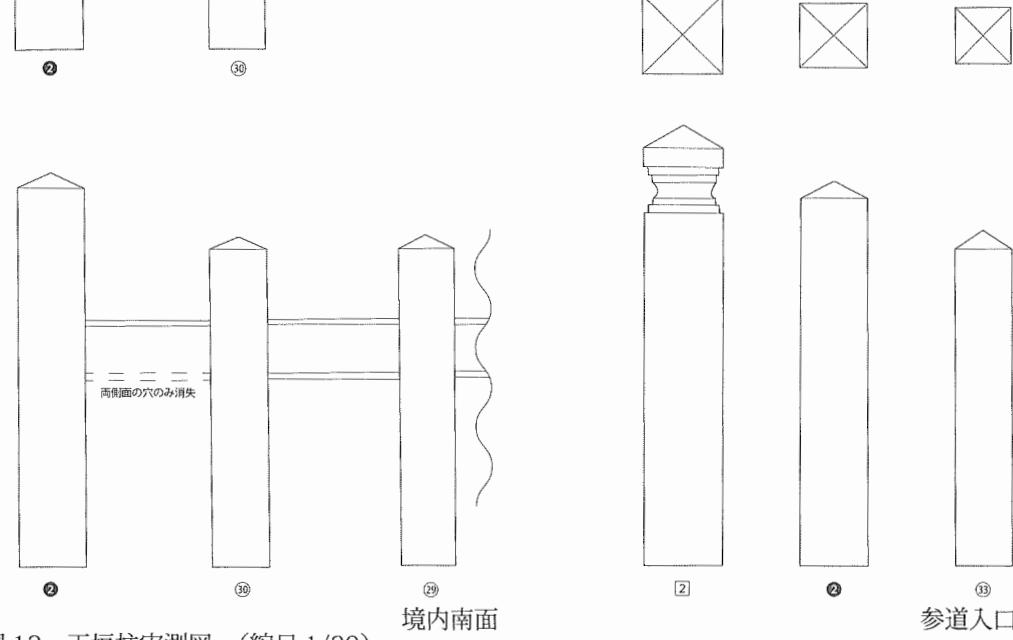


図12 玉垣柱実測図 (縮尺1/20)

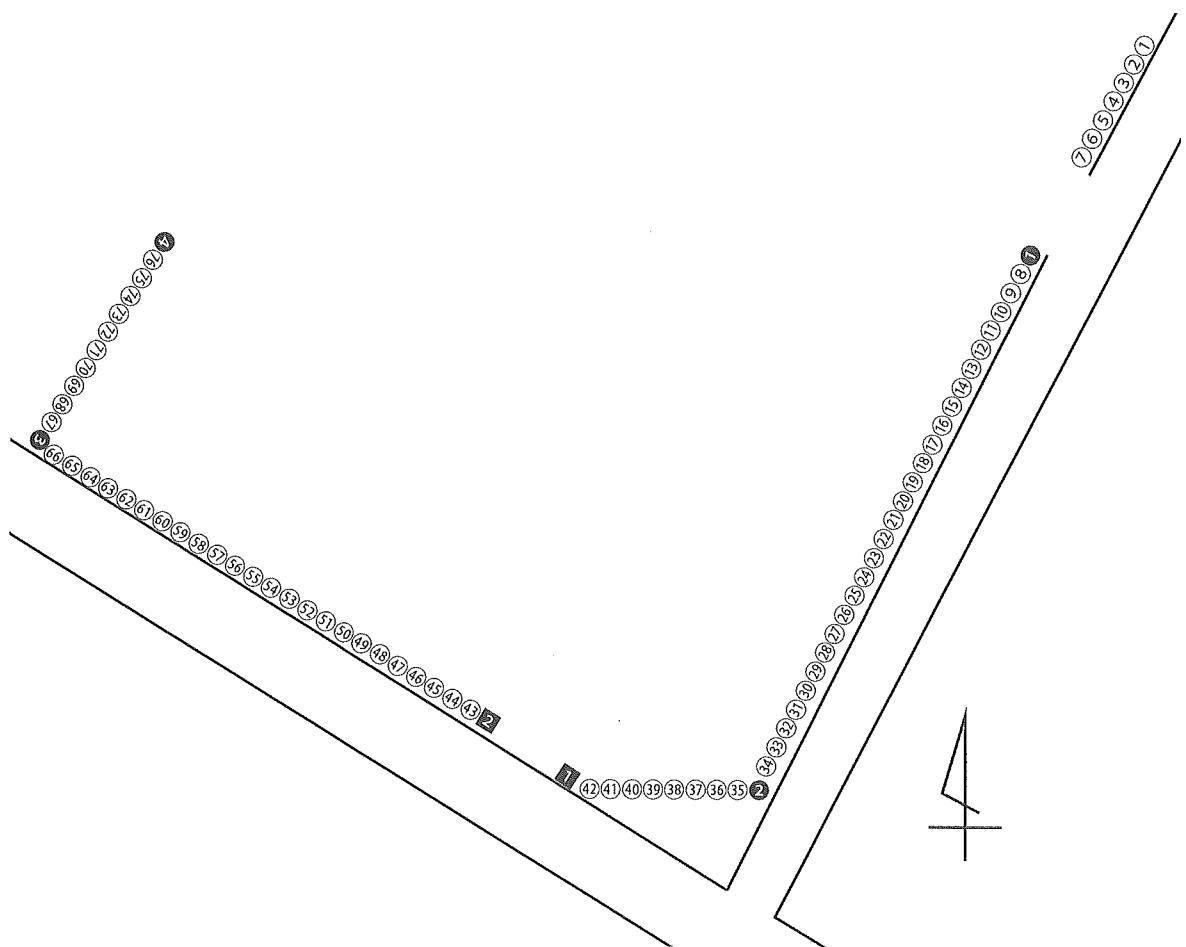
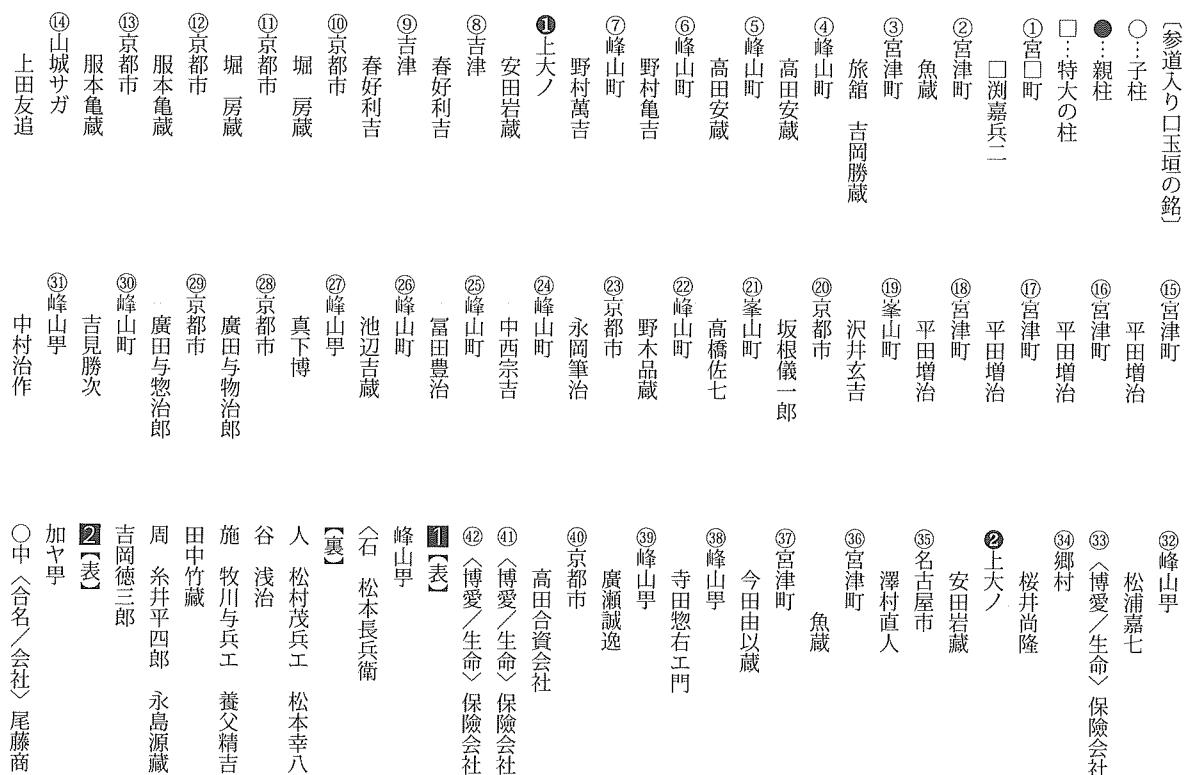


図 13 参道入口玉垣配置図





表紙の解説

	1 2 3
5 (裏)	4
	(表)

- 1 丹後風土記残欠倉部山 = 高梯郷の中心地  
(舞鶴市多門院字梯木林) 新谷一幸氏撮影
- 2 大宮壳神社旧本殿の調査風景 近藤史昭氏撮影
- 3 稲の虫送り (舞鶴市多門院) 新谷一幸氏撮影
- 4 舞鶴湾口から青葉山など東地域の山 松岡秀雄氏撮影
- 5 京丹後市大宮壳神社の境内 菱田哲郎氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書 (2008 ~)

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報  
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山域の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 八幡・南山城地域の寺院資料と信仰—京都府歴史資料調査—
- 11 舞鶴の文化遺産と活用
- 12 「丹後の海」の歴史と文化
- 13 古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究



京都府立大学文化遺産叢書 第14集  
舞鶴・京丹後地域の文化遺産

編 集 東 昇・菱田 哲郎  
発 行 京都府立大学文学部歴史学科  
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5  
発行日 2018年3月30日  
印 刷 サンケイデザイン株式会社  
〒603-8165 京都市北区紫野西御所田町14番地2